

(18)

氏名(生年月日)	ナカ ヲ ユウ ソウ 中 谷 雄 三
本 籍	
学位の種類	医学博士
学位授与の番号	乙第663号
学位授与の日付	昭和59年6月15日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当(博士の学位論文提出者)
学位論文題目	肺癌の臨床病理学的研究
論文審査委員	(主査)教授 織畑 秀夫 (副査)教授 梶田 昭, 教授 串田つゆ香

論文内容の要旨

研究目的

肺癌は、近年その発病および死亡の頻度が急激に増加し、国民の健康に対する重大な脅威となりつつあるが、早期発見、治療、予後の管理など、臨床上の各面にわたりなお解明すべき点が少なくない。著者は病理解剖学的資料の検索によって肺癌の実態を明らかにする目的で、本研究を行なった。

研究方法

本学第2病理学教室で1966年4月から81年12月までに行なわれた肺癌剖検例128例(全悪性腫瘍例中10.5%)のうち資料の保存が完全であった126例を対象とした。これらの例につき、臨床記録、剖検記録を調査すると共にその組織標本を鏡検し、臨床経過、病理組織型、主要発育部位、浸潤・転移臓器を中心に検討を行なった。必要に応じて有意性の有無をカイ2乗テストによって判定したが、一律に5%を有意水準として採用した。

研究成績

1. 肺癌例の性比は男女ほぼ3:1であり、死亡年齢は、両性とも60歳台にピークをもつ単峰分布を示す。

2. 発病より死亡に至る経過月数を、最頻値、中央値、平均値の3特性値で示すと、男性ではそれぞれ4.7月、7.8月、11.3月、女性では5.0月、6.8月、10.3月で、いずれも正の方向に尾を引く分布の型になる。両性合せた平均経過月数は11.1月であった。

3. 初発症状を、咳嗽、血痰、胸痛などの肺性症状、肺癌転移や一般反応からなる肺外症状に分けると、初発症状のあり方と経過月数とは密接な関連を示し、と

くに肺外症状群では平均経過月数7.8月と短い値を示した。胸部X線像によって偶然発見されるに至った無症状群は14.9月と最も長い経過日数を示した。

4. 組織学的には、腺癌が過半数を占め、(53.2%)、以下、扁平上皮癌(21.4%)、大細胞癌(12.7%)、小細胞癌(11.1%)、粘表皮癌(1.6%)の順であった。扁平上皮癌は男性にやや多い傾向がみられ、また腺癌が60歳台を中心に上下に比較的対称な年齢分布を示すのに対して、扁平上皮癌は高齢に偏る傾向が認められた。

5. 周囲臓器への浸潤と組織型との間には著明な関係が認められなかったが、リンパ行性転移、血行性転移と組織型との間には明らかな関連を認めた。リンパ節転移は一般に扁平上皮癌では少なく、その他の組織型の場合におこりやすい。胸腔内、鎖骨窩や頸部などの近傍リンパ節、腹腔内リンパ節のいずれについてもこの傾向が認められた。血行性転移は、肝、副腎、骨、腎の順におこっているが、肝、骨転移は扁平上皮癌に比べて腺癌、大細胞癌において有意に多く、副腎転移も扁平上皮癌に比べて腺癌に多い。とくに転移臓器の組合せが、副腎のみ、骨および肝、骨・肝および副腎という型を示すのは高分化性腺癌の場合が際立って多かった。

6. 剖検記録より原発部位の推定を行なうことは、多くの場合、困難であったが、主腫瘤の位置によって、全例を「大気管支群」、「肺実質群」に二分すると、その経過日数は後者の方がやや長いことが認められた。大気管支群には小細胞癌がやや多く、肺実質群には腺

癌がやや多いが、扁平上皮癌の頻度には両群の間には著しい差がみられなかった。

結論

肺癌の予後は一般に不良であり、とくに肺外への浸潤、転移の有無が、予後を決める要因としてきわめて重要であることを指摘した。組織学的な分化方向と、癌のリンパ行性ないし血行性転移との間には、密接な

関係があり、扁平上皮癌は局所癌、腺癌は全身癌の性格をもつことを明らかにした。肺内における腫瘍の主要発育部位と組織型との間には十分な関連を証明できなかったが、これは剖検肺における腫瘤の占居部位が、必ずしも原発部位に忠実に反映しないためと推定した。

論文審査の要旨

肺癌は近年急激に増加し、その対策が重視され、早期発見、早期治療、予後管理など種々検討が進んでいる。著者はその基礎的研究の一つとして肺癌の病理解剖例について臨床所見と病理組織所見とを比較検討し、組織型と予後との関連性の強いことを明らかにし得ている。

本論文は臨床医学に寄与するところに大にして、学術上価値あるものと認める。

主論文公表誌

肺癌の臨床病理学的研究

東京女子医科大学雑誌 第54巻 第3号

305～317頁（昭和59年3月25日発行）

副論文公表誌

1) 外傷性肝破裂のCT

腹部画像診断 3 (3) 291～297 (昭58)

2) 外科的呼吸器疾患 第1報 最近の外科的胸部

疾患の流れとそれにおける肺癌の比重及び発見の動機による肺癌手術評価の検討

東女医大誌 53 (1) 8～18 (昭58)

3) 外科的呼吸器疾患 第2報 当科において最近

5年間に経験した肺の良性腫瘍

東女医大誌 53 (2) 137～147 (昭58)

4) 食道 Granular Cell Tumor の1例

東女医大誌 53 (1) 52～58 (昭58)

5) 縦隔腫瘍の診断

臨床成人病 11 (4) 579～584 (昭56)

6) 胎児内胎児の2例

東女医大誌 48 (8) 662～666 (昭53)

7) 鰓原性癌と思われる1例

外科診療 19 (8) 979～982 (昭52)